

5月27日(日) 16:15～16:55 第一分科会:九州国立博物館ミュージアムホール

パウル・クレーの1918年の文字絵《かつて夜の灰色から浮かび上がった 色彩文字》
—その制作状況を巡る考察—

成城大学 野田 由美意
NODA Yubii

1918年にクレーは一点の文字絵《かつて夜の灰色から浮かび上がった 色彩文字》を制作した。「文字絵」("Schriftbilder")とは、詩を挿入して画面全体が構成され、線によって形成された文字の間隙が着色されている1916～1921年の作品群である。この文字絵の詩の出典は、明らかではない。これまでの研究では、おそらくクレー自身の作という息子フェリックス・クレーの推測を拠り所としている場合が多い。グレーゼマーはその可能性も疑わしいとしつつ、この詩が1918年にクレーが挿絵を描いたテオドール・ドイプラーの『銀の三日月と』とも、『詩篇』とも、また1916年の文字絵の原典となった中国の詩とも関連性が無いと述べている。コントはクレー作の説に依拠しつつ、『詩篇』と中国の詩に無関係としている。この文字絵についての言及は多いが、フェリックス・クレーの推測が非常に信頼出来るものとしても、この詩の源泉の可能性について当時の制作状況を十分に検証して述べたものは上記の二人の研究も含め、無い。

本発表では、作品の構成と詩の内容を分析した上で、詩をクレー自身が作ったということを前提に、従来の研究で見落とされたこの詩の源泉の可能性を、文字絵の制作状況を考察することによって再検討する。つまりこの作品を、1918年にクレーの父ハンス・クレーが自由訳し、クレー自身も1913年以来挿絵に取り組んでいた『詩篇』や、クレーが1916年に入手した『ギルガメッシュ叙事詩』、またドイプラーの『銀の三日月と』と照らし合わせる。父ハンスの自由訳『詩篇』と、1916年刊行のブルクハルト訳『ギルガメッシュ叙事詩』は、クレーの所蔵本としてクレーハウスコレクションに保管されているが、これらの資料については従来のクレー研究で言及されたことが無い。

この文字絵の詩は、第一に天体の運行を表し、作品上の色彩はそれを図解していると推測される。しかしながらこの詩には、解釈に決定的に必要な主語が欠けている。色彩の意味を明らかにするためにも、主語の特定を上記の各テクストとクレーの所蔵したイエレミアスの『古代オリエントの光に照らされた旧約聖書』を参照しつつ行う。天体の運行を問題としたテクストで1918年当時クレーに最も身近であったのは、これらのテクストだからである。この一連の考察によって詩の前半部の主語は、「太陽」と「色彩」、後半部の主語は「月」、またドイプラー、クレーを含む「私たち」(『銀の三日月と』で用いられる“Wir”)と推定され、クレーはこれらのテクストから感銘を受けて、独自の解釈の中にこの文字絵を制作したということが導き出される。そして、この作品によってクレーは、第一次世界大戦の最中にあつた「私たち」に、天体の運行における大自然の法則、死と再生の法則を思い出させ、そこからまだ見えない新しい生命の可能性を示唆しようとしたと考えられる。